

外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部
外国語教育基礎研究部会 第 3 回年次例会
発表プログラム・予稿集



日時 2016年2月27日(土)
会場 名古屋学院大学 名古屋キャンパス 白鳥学舎 曙館
〒456-8612 愛知県名古屋市熱田区熱田西町1番25号
主催 外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部 外国語教育基礎研究部会

Twitter ハッシュタグ: [#kisoken2015](https://twitter.com/kisoken2015)

お問い合わせ先:
外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部
外国語教育基礎研究部会 事務局
川口 勇作 (名古屋大学大学院生)
y.kawaguchi@nagoya-u.jp

ごあいさつ

第三回年次例会に寄せて

田村 祐

外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部 外国語教育基礎研究部会 部会長・
名古屋大学大学院生

本日は、外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会（以下、基礎研）の第三回年次例会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

さて、昨年度の例会では、卒業論文や修士論文を書き上げた学生が集い、その成果を発表しあう場として、卒業論文・修士論文発表のセクションを設けました。卒業論文発表1件、修士論文発表3件の応募があり、大変活発な議論が行われました。発表者の方にとっては、非常に貴重な経験となったことと思います。今年度は、広く中部地区の大学や大学院に在籍する学生の方々にも昨年度のような機会を経験していただくべく、年次例会とは独立したイベントとして、「中部地区卒業論文・修士論文発表会」と題して開催することとなりました。開催にあたっては、中部地区英語教育学会に共催をいただいております。中部地区英語教育学会として、この会の開催を後押ししてくださった早瀬光秋会長、また、実務的な面でご尽力いただいた藤田賢運営委員長、ならびに、中部地区英語教育学会の運営委員の先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。

今年度の例会は、午前中に自由研究発表、夕方には信州大学の酒井英樹先生のご講演というプログラムとなっています。昼食休み後の午後には、前述の卒業論文・修士論文発表会がありますので、そちらにもぜひご参加ください。自由研究発表は、4件の応募をいただきました。昨年度に比べると、件数自体は少なくなっていますが、その分たくさんの方に発表をご覧いただくことができと思います。酒井英樹先生には、否定フィードバックの一種であるリキャスト（言い直し）についてお話いただきます。昨今のいわゆるエビデンスベーストの考え方が外国語教育研究に入ってきたこともあり、教室で行われる実践を対象にした第二言語習得研究（教室 SLA 研究）の真価が問われていると私自身感じております。そういった中で、理論と研究の橋渡しを目指して研究をされてきた酒井先生に SLA 研究に関するお話をいただくことは大変に意義深いことでもあります。また、この講演は、リアリーイングシツリユ株式会社様のご援助をいただいております。御礼申し上げます。

私も基礎研も、発足から三年目も迎えました。私も含め、会の運営はすべて大学院生で行っております。それでも週例会と称した勉強会を毎週開催し、こうした年次例会の開催、年度ごとの報告論集の発行を行えていますのも、皆様のご支援の賜物であると、心より深く感謝しております。これからも、皆様のご期待にお応えできるよう精一杯努力してまいりますので、今後とも変わらぬご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。

プログラム

10:00-

受付(5階 502室前)

10:30-10:35

開会式(5階 502室)

司会: 西村 嘉人(名古屋大学大学院生)

挨拶: 田村 祐(外国語教育基礎研究部会 部会長)

10:40-11:45

一般研究発表

第一室(5階 516室)

10:40-11:10 実証研究

L2ライティングにおける統語的複雑さ指標の選択:構成概念妥当性の観点から1

西村 嘉人(名古屋大学大学院生)

11:15-11:45 実証研究

文法性判断課題における反応時間と主観的測度は正答率を予測するか:

文法項目の違いに焦点をあてて2

田村 祐(名古屋大学大学院生)

第二室(5階 517室)

10:40-11:10 展望

外国語教育研究における再現可能性と文芸的プログラミングのすすめ3

草薙 邦広(名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

11:15-11:45 実践報告

ラーニング・コモンズの外国語教育への応用4

中島 敬之(京都大学大学院生)

南條 浩輝(京都大学)

壇辻 正剛(京都大学)

一般研究発表 タイムテーブル

	第一室(516室)	第二室(517室)
10:40- 11:10	L2ライティングにおける 統語的複雑さ指標の選択(西村)	外国語教育研究における再現可能性と 文芸的プログラミングのすすめ(草薙)
11:15- 11:45	文法性判断課題における反応時間と 主観的測度は正答率を予測するか(田村)	ラーニング・コモンズの外国語教育への応用 (中島・南條・壇辻)

16:00-17:10

基調講演(5階502室)

講師紹介: 田村 祐(名古屋大学大学院生)
提 供: リアリーイングリッシュ株式会社
<http://www.reallyenglish.co.jp/>

否定フィードバックの言い直し(recasts)について考える

酒井 英樹

信州大学 教育学部 教授

言い直し (recasts) は、第二言語習得研究において最も多くの焦点があてられてきた否定フィードバックの1つです。また、教育的にも、Focus on Form を促進する1つの手段として注目されてきました。なぜ、第二言語習得研究者は、言い直しに注目してきたのでしょうか。言い直しは教育的に効果があるのでしょうか。また、言い直しをどのように与えていけば良いのでしょうか。本講演では、私が行ってきた研究を紹介しながら、(1) 言い直しの役割と意義、(2) 言い直しに関する研究の経緯、(3) 言い直しに関する教育的示唆、(4) 今後の方向性について、考えていきます。

17:10-17:20

閉会式(5階502室)

司会: 西村 嘉人(名古屋大学大学院生)
挨拶: 田村 祐(外国語教育基礎研究部会 部会長)

18:00-21:00

懇親会

事務局から

本日のお食事について

本日は、会場内には食事をとることのできる店舗、購入することのできる店舗はございません。予めご了承ください。なお、会場の西側に出ていただくと、コンビニエンスストアや、食事をとれる店舗が数軒ございます。

懇親会について

本日の例会終了後、18時より、懇親会を開催いたします。受付にて参加のお手続きをお済ませください。例会終了後に担当者が会場までご案内いたします。

週例会について

学期中の毎週、週例会と称して勉強会を開催しており、研究の発表や文献の輪読を行っております。今年度は、18時15分より、名古屋大学にて開催しておりました。どなたでもご参加いただけますので、関心のある方は事務局までお気軽にお問い合わせください。

基礎研 研究相談フォーラムについて

基礎研では、外国語教育研究についての質問や相談を行う場として、「基礎研 研究相談フォーラム」を運営しております。研究内容や研究方法についてお悩みの方なら、どなたでも投稿いただけます。ぜひご利用ください。 http://9326.teacup.com/kisoken_forum/bbs/t1/150

外国語教育基礎研究部会 報告論集について

基礎研では、年に一回、オンライン上で報告論集を発行しています。今年度も投稿のお申し込みを受け付けます。投稿に関する詳細は当部会のサイトで告知させていただきます。過年度の報告論集はLET 中部支部サイト上の研究部会ページにて公開しております。

一般研究発表

予稿

L2ライティングにおける統語的複雑さ指標の選択 —構成概念妥当性の観点から—

西村 嘉人
名古屋大学大学院

Keywords: 統語的複雑さ, L2ライティング, 学習者コーパス

1. はじめに

第二言語 (L2) の産出能力 (ライティング・スピーキング) を「複雑さ・正確さ・流暢さ (Complexity, Accuracy, Fluency: CAF)」という3つの観点から測定・評価する研究が近年盛んに行われている。本発表では, CAF の中でも複雑さ, 特にライティングにおける統語的複雑さの概念に焦点を当て, それを測定する際に用いられる指標の妥当性を検証することを目的とする。

2. 概要

統語的複雑さとは, 一般的に「産出された言語形式の多様さ, 精巧さの程度 (Ortega, 2003)」と定義され, 学習者が備えている認知的な能力, つまり構成概念として仮定されている。この概念を測定するために, これまで様々な指標が提案され用いられてきた。しかしながら, 統語的複雑さを測定する際に用いられる指標は, 研究者間で必ずしも定まっていない。Wolfe-Quintero, Inagaki, & Kim (1998) や Ortega (2003) のメタ分析の結果をもとに, 学習者の習熟度と相関関係が見られた T-unit の平均語数 (MLT) や, 節あたりの平均語数 (MLC) などの指標が, 代表的に用いられることが多い。その一方で, Norris and Ortega (2009) では, 異なる習熟度の学習者に対して同じ指標を用いることに警鐘を鳴らし, 統語的複雑さを階層的な構成概念 (文の複雑さ, 節の複雑さ, 句の複雑さ) として捉え, 学習者の習熟度によって発達する統語側面が異なることから, 習熟度に応じた適切な指標を選択することを提案している。

しかしながら, これまで用いられてきた代表的な指標は, その指標が適切に学習者の能力を測定出来ているかという構成概念妥当性の観点からはあまり検証されておらず, 学習者の習熟度との相関の強さという観点から指標を選択していたに過ぎない。そこで本発表では, 大規模な学習者コーパスをもとに, 階層的な構成概念モデルに基づいて, これまで使用されてきた統語的複雑さの指標値を対象に偏相関係数を算出し, 指標の妥当性について検証する。

3. データ分析

学習者コーパスは, International Corpus of Learner English Version 2 を用いた。指標値の算出には, L2 Syntactic Complexity Analyzer を用いた。算出した指標値をもとに, 階層的統語的複雑さの枠組みに則り, 構成概念妥当性の観点から妥当性のある指標の提案を行う。また, 統語的複雑さという構成概念についても議論する。

参考文献

- Norris, J. M., & Ortega, L. (2009). Towards an organic approach to investigating CAF in instructed SLA: The case of complexity. *Applied Linguistics*, 30, 555–578. doi:10.1093/applin/amp044
- Ortega, L. (2003). Syntactic complexity measures and their relationship to L2 proficiency: A research synthesis of college-level L2 writing. *Applied Linguistics*, 24, 492–518. doi:10.1093/applin/24.4.492
- Wolfe-Quintero, K., Inagaki, S., and Kim, H-Y. (1998). *Second language development in writing: measures of fluency, accuracy, and complexity*. University of Hawai'i, Second Language Teaching and Curriculum Center.

文法性判断課題における反応時間と主観的測度は正答率を予測するか —文法項目の違いに焦点をあてて—

田村 祐
名古屋大学大学院生

Keywords: 文法性判断課題, 一般化線形混合モデル

1. 背景

本研究の目的は、文法性判断課題における反応時間と主観的測度の関係が、言語規則間で異なるかどうかを検証するものである。対象とする言語項目は、普通名詞と物質名詞である。Tamura and Kusanagi (2015)は、前述の2項目を対象として、時間制限を設けない文法性判断課題と、できるだけ早く回答するように指示した文法性判断課題における正答率を比較した。そして、時間制限のあるタスクの正答率を明示的知識によるもの、早く回答するに支持した条件での正答率を暗示的知識によるものと仮定した。結果として、急いで回答した場合には普通名詞についての正答率が著しく低下するが、物質名詞についてはそのような傾向は見られないことを示した。

しかしながら、Tamura, Harada, Kato, Hara, and Kusanagi (in press)が指摘するように、文法性判断課題では判断の速さ以外にも、その判断の基準となった言語規則についての意識軸を考慮する必要がある。

2. 本研究

実験参加者は、Tamura et al. (in press)と同様の大学生24名である。参加者はコンピューター画面上に1文ずつ呈示される英文を読み、その文法性をキー押下によって判断する文法性判断課題を行った。1試行ごとに、直前の文法性判断が「自分の知っている規則によるもの」であるか「直感」であるかの二値判断も求められた。本研究では、前者を意識的な知識、後者を無意識的な知識とし、主観的測度の要因とした。

実験項目は、普通名詞・物質名詞とも12項目で、それぞれが文法文と非文法文の2条件で呈示された。2つのリストでカウンターバランスを取り、普通名詞項目12文、物質名詞項目12文とフィラー項目40文を合わせた計64項目の文法性判断であった。

3. 結果と議論

一般化線形混合モデルによる分析を項目ごとに行った結果、普通名詞項目では規則を説明できると答える場合に正答しやすいという結果が得られたものの、物質名詞項目では主観的測度要因は正答率を予測しなかった。また、反応時間はいずれの項目においても正答率を予測しておらず、主観的測度との交互作用も見られなかった。この結果は、(a)普通名詞に関しては意識的な知識を持っているが、それらは必ずしも遅いとは限らないこと、(b)物質名詞に関しては意識的な知識も無意識な知識も持っていなかったこと、を示しており、時間軸と意識軸の関係が言語項目によって異なる可能性を示唆している。

参考文献

- Tamura, Y. & Kusanagi, K. (2015). Asymmetrical representation in Japanese EFL learners' implicit and explicit knowledge about the countability of common/material nouns. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 26, 253–268.
- Tamura, Y., Harada, Y., Kato, D., Hara, K., & Kusanagi, K. (in press). Unconscious but slowly activated grammatical knowledge of Japanese EFL learners: A case of *tough* movement. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 27.

外国語教育研究における再現可能性と文芸的プログラミングのすすめ

草薙 邦広
名古屋大学大学院生
日本学術振興会特別研究員

Keywords: 研究方法, 再現可能性, 統計改革, 文芸的プログラミング

1. はじめに

科学的手法 (scientific method) による外国語教育研究は、長く見積もっても半世紀程度の歴史ももたない比較的若い研究分野であり、特にデータ分析に関わる統計手法の選択、データ収集方法のデザイン、結果の報告、そしてその解釈の適切さについて、関連分野と比しても決して高い水準にあるとはいえない (草薙・水本・竹内, in press)。特に近年は、さまざまな社会的な要因によって、外国語教育研究の質、とりわけ、再現可能性 (reproducibility) に関する研究者の意識が高くなりつつある。そこで、本発表では、外国語教育研究における再現可能性の問題を指摘した上で、近年注目を浴びている再現可能な研究 (reproducible research, RR) および、それを可能にする文芸的プログラミング (literate programming) について紹介し、今後の研究方法論に関する展望を述べる。

2. 再現可能な研究と文芸的プログラミング

再現可能性は科学的方法の主要な要件であるが、心理学分野を筆頭として、刊行論文で報告された研究成果が、必ずしも後の研究で再現されるものでないことがわかっている (e.g., Open Research Collaboration, 2015; Wicherts, Borsboom, Kats, Molenaar, 2006)。この問題を解決するための取り組みとしてなされているのが、再現可能な研究である。再現可能な研究とは、追行研究を可能にするすべての情報 (e.g., データ, 材料, 分析環境, 分析コード, 分析結果) を備えた論文の共有をもって学術的成果とするアイデアである。これは、文芸的プログラミング (Knuth, 1984) とよばれる技術によって可能になる。文芸的プログラミングは、論文の内容面にあたる「ドキュメント」と、収集したデータ, 材料, 分析コードなどにあたる「ソース」を、それぞれメタ・プログラミング言語によって管理することで、一元的に記述するプログラミング・スタイルである。これによって、ソースの一部を変更するのみで、自動的に追行研究が可能になり、再現可能性の検証を容易にする。

3. 外国語教育研究における応用

本発表では、文芸的プログラミングを取り入れることが、外国語教育研究の質を飛躍的に高める可能性があることを主張する。しかしながら、外国語教育研究者が高度なプログラミング技術を習得している例は稀であり、その実行可能性が低いことも事実である。そこで、誰しもが半自動的に文芸的プログラミングを行える機能を、電子的ティーチング・ポートフォリオ管理エンジンに組み込むことが有効であることを示し、そのような研究者・教育者支援ツールの開発に関する構想を述べる。

参考文献

- Knuth, D. (1984). Literate programming. *The Computer Journal*, 27, 97–111.
- 草薙邦広・水本篤・竹内理 (in press). 「日本の外国語教育研究における効果量・検定力・標準サイズ—Language Education & Technology 掲載論文を対象にした事例分析—」 *Language Education & Technology*, 52.
- Open Science Collaboration. (2015). Estimating the reproducibility of psychological science. *Science*. doi:10.1126/science.aac4716.
- Wicherts, J. M., Borsboom, D., Kats, J., Molenaar, D. (2006). The poor availability of psychological research data for reanalysis. *American Psychologist*, 61, 726–728.

ラーニング・コモンズの外国語教育への応用

中島 敬之
京都大学大学院生

南條 浩輝
京都大学

壇辻 正剛
京都大学

Keywords: 少人数学習, 文化発信型学習, ランゲージ・コモンズ

1. 取り組み概要

我々は京都大学学術情報メディアセンター内において、少人数スペースで日本人大学生と留学生とが交流しながら外国語学習を行う「ランゲージ・コモンズ」を展開している。従来の CALL 教室を少人数ブースに区切った上で、各ブースに電子黒板(タッチパネル型大型ディスプレイ)、板書内容をそのまま印刷できるホワイトボード、PC 等を設置し、デジタルデータおよびアナログデータ(手書きメモなど)のいずれも保存・共有可能とする学習環境が整えられている。少人数ブースは留学生 OA と日本人院生がチームを組み、英語、中国語、ドイツ語に分けて運営されている。現在各ブースの利用は、事前予約制となっている。専用 Web サイトからの予約を通じて、事前に学習者のレベル等の把握を行うことも可能であり、各ブース担当の留学生の円滑な運営を手助けする仕組みとなっている。また海外での学びに近い臨場感の演出として、大型ディスプレイまたはマルチディスプレイを実際に海外で撮影した大学や街の写真を表示している。

2. 学習形態

学習テーマの 1 つに「海外留学や海外移住などを行った際に支障となる文化差による壁を克服するために、実際に留学生の母国の文化や教育環境など、日本にはなかなか耳にすることのできない生の声を聞き、外国語学習と留学・渡航準備ができること」を掲げている。各ブース担当の留学生と日本人学生とが相談し、扱う内容を決めることができるという京都大学伝統の自主ゼミの形態にも配慮している。我々の研究室で開発している「日本文化を外国語で発信する内容のデジタル語学教材」を用いることで、単なる外国語の学習に留まらない学び、すなわち日本人学生が外国語学習を行うだけでなく、日本文化を学ぶという点から留学生にとっても学びを生み出し、学び合いを可能とする環境を提供している。

3. 今後の課題と展望

本取り組みでは教育歴が全くなく、教授法についても知識のない留学生が関わっているが、学生からの疑問に答えていく過程で各自の知識を深めることにも成功している。また、交流の中で学びを深めていくため、教授者と学習者という関係性に陥らない工夫が必要となる点も運営の上では課題となる。これらの改善に取り組むことは、大学における外国語教員の指導などに活かすことが出来ることが考えられ、学生が能動的に学修に取り組むアクティブ・ラーニングの教育面からの有用性も期待できる。

参考文献

京都大学学術情報メディアセンター教育支援システム研究部門語学教育システム分野
<http://www.al.media.kyoto-u.ac.jp>
壇辻正剛 (2015). 「語学教育システム研究分野」『2014 年度京都大学学術情報メディアセンター年報』 51-55.

Nagoya.R #15

2016年3月下旬開催予定

場所：名古屋大学東山キャンパス国際開発研究科棟

時間：13時開始（予定）

初心者・入門者大歓迎！

発表者絶賛募集中！Rに関することならなんでもOK！



<-前回のNagoya.Rの情報はこちらから

参加・発表に関するお問い合わせはこちらまで-> 運営代表: 川口勇作 (y.kawaguchi@nagoya-u.jp)

Twitterにて最新情報随時更新中！（ハッシュタグ：#NagoyaR）

外国語教育メディア学会（LET）中部支部 外国語教育基礎研究部会



外国語教育基礎研究部会では，外国語教育における基礎的な理論や研究法・統計手法を学んでいます。

週に一回勉強会（**週例会**）を開催し，文献の輪読などを通して研究についての知識の共有をはかっています。

その他にも今回のような年次例会や，研究者の方を招いた講演会なども開催しています。